

第3回ぶんぱくあり方検討会 議事要旨

1 開会

委員7名中7名出席

＜藤野会長、五月女委員、佐久間委員、染川委員、吉成委員、河合委員、浅田委員＞

関係機関：明石市立天文科学館、明石市立文化博物館、政策局 SDGs 共創室市民とつながる課

事務局：市長、副市長、市民生活局長、市民生活局文化・スポーツ室長、市民生活局文化・スポーツ室

傍聴者6名

2 市長あいさつ

・第3回ぶんぱくあり方検討会に出席の委員のみなさま、傍聴のみなさま、本当にありがとうございます。

・2月2日(月)の市民ワークショップにたくさんの参加ありがとうございました。

・今日は、ぶんぱくのビジョンや方向性についてご議論いただきたい。

・まず、ビジョンを決め、実践を通してビジョンに戻ることが大切と考えている。そのために、委員のみなさまの知見を共有し、皆様のご意見を参考にぶんぱくの発展を図りたい。

・京都国立博物館を訪れたが、展示について教えてもらってから見学すると、見方が変わることを実感した。このような経験を積み重ねることで、何度も訪れたい博物館になるのではないかと考えている。

3 報告

(1) 第2回ぶんぱくあり方検討会のまとめ・振り返り

(2) 市民ワークショップの報告について

(事務局：資料1「第2回ぶんぱくあり方検討会まとめ」説明)

(事務局：資料2「市民ワークショップの報告について」説明)

【市民ワークショップに参加された委員からの報告】

(委員 C)

- ・市民ワークショップの参加者は博物館に親しみのある人々が中心で、求めているものがそれなりにはっきりしていた。
- ・参加者のなかでは、子どもたちや交流が重視されていることが分かった。
- ・「カフェ」が象徴的であった。それは、近くの兵庫県立考古博物館がイベントや子どもたち向けの展示を行っていることも影響しているようだ。
- ・兵庫県立考古博物館と明石のまちなかにあるぶんぱくは位置づけが異なるため、この博物館が目指す方向について深く考える必要があると感じている。

(委員 B)

- ・博物館に親しみを持つ人や近い距離にいる人が多かった印象。
- ・博物館未経験者も参加し、異なる意見を取り入れることが重要だと感じている。
- ・市民との継続的な交流や意見収集が重要であり、意見をもらいながら一緒に作っていくことが重要で、幅広い意見が出てくると議論が活発になる。

(委員 D)

- ・ワークショップでは自分の既知の中から希望が出てくる。その希望を博物館でどう実現するかは別の段階での深い掘り下げが必要。
- ・例えば、リラックスという言葉が出たが、それをどう博物館なりの知的なものにしていくか、チャレンジングな課題をいただいた。
- ・次のワークショップは対象や内容が決まっていないのであれば、やらなくてもいい。決まってからやればいい。
- ・明石市のつながる課のワークショップ運営の能力と進行を評価。関係者が持っている力と委員たちの協力で、いろんなことができる可能性を感じた。

(委員 F)

- ・博物館に親しみのある人が集まっており、歴史に関心が高いひとが多かったと感じた。
- ・参加したグループは、半分が明石出身ではない人。その人たちの明石の印象は、生活のしやすさ、住みやすさで、世代間交流や交流施設の充実を望まれていた。
- ・カフェやオープンスペースなどの提案に対して参加者から積極的な反応があったと感じられた。

(委員 A)

- ・プロのファシリテーター(市民とつながる課)の進め方がうまかった

・参加者はぶんぱくのボランティアの方、博物館のコアな客層がほとんどだったので、他の人たちの意見をどう聞くかということに関心がある。

(委員 D)

・最近美術系の特別展が多いことに不満を感じている歴史系の方が、指定管理者制度の下で歴史系の展示が少ないことに関して意見を述べていた。指定管理者制度の仕組みをご存じないので、そのような意見が出た可能性がある。

(委員 A)

・2018 年(平成 30 年)まで、明石文化芸術創生推進会議を年に何回か開いていた。2018 年の文化芸術の方向性の分析結果には、明石文化国際創生財団や市民会館、文化博物館に特化したところもあるが、分析結果が会議では生かされていない。

・明石文化芸術創生基本計画では「創造活動の促進」が重要視されており、先端的な芸術文化の創造と発信、そして発信拠点の創出が含まれている。市民が文化芸術に触れる機会は充実している一方で、先端的な芸術文化に触れる場や事業が不足しているという意見が出されている。また、歴史や民族に偏った資料や展示があると現代アートが弱くなると感じられることも指摘されている。ぶんぱくのスペックが限られている中で、求められているすべての内容ができるのかどうか、疑問である。

3 議事

(1) ぶんぱくのビジョン・方向性について

(2) 今後の予定について

(事務局:資料3「ぶんぱくのビジョン・方向性について」、資料4「今後の予定について」)

(委員 C)

・ここにある 10 個のフレーズは、どのような想いを込めて作ったのか。例えば、「明石の文化を守り、活用し、継承していく」というフレーズには、どんな意味が込められているのか。事務局がこのフレーズにした理由は何か。

(事務局)

・これまでの検討会、職員の意見交換会、市民のワークショップで出てきたキーワードから抽出した。

(委員 B)

・博物館について、市から大きなビジョンや方向性が提示されると、委員会としての議論がしやすい。このような市のビジョンが議論の出発点になる。議論の前に事前に考えを提示してもらえると、議論がスムーズに進む。

(委員 C)

・「明石の文化を守り、活用し、継承していく」は文化財政策、「子どもたちの想像力や探求心を引き起こす」は社会教育政策に関連している。これらは明石市のビジョンの中で異なる方向性を示している。しかし、現在の博物館の役割や政策の方向性は明確に示されておらず、博物館がどのようなビジョンや政策のもとで運営されるべきかが漠然としている。具体的な政策や方針が不明瞭なので、博物館がどのような役割を果たすべきか、市からの要望は何かなどが明確でないままビジョンを決めると、何を決めたかわからなくなるので、事務局の意図をお聞きした。

【基本方針・方向性】

(委員 A)

・明石市の文化政策全体のグランドデザインがまずあり、その中で文化博物館の役割を明確にした方がよい。そこから切り離してぶんぱくだけこうしたいというのは難しい。

・文化政策の全体像、市の政策におけるぶんぱくの位置づけが見えていない状態で、ぶんぱくがどの分野に特化するかは決められない。

・博物館は市民の学びの場所という役割が一番大きいと思うが、ここのフレーズではそれが比較的弱い。ここには、子どもたちに向けた内容、文化財政策、コミュニティやまちづくりのこともある。それを全部ぶんぱくがやる必要があるのかどうか。ぶんぱくが何をするとところなのかが明確でないので、どこに特化するかも決められない。

(委員 B)

・基本理念・ビジョンが明確になれば、方針・方向性が議論できるようになるのが本来のやり方である。

・基本方針・方向性の1, 2は博物館としては明確なものなので、議論の余地が少ない。3, 4は議論の前に理念・ビジョンの整備が必要。市の文化芸術創生基本計画など博物館に関係する計画などを紹介してもらうことが、議論の一助となる。

(市長)

・文化博物館は開館から 30 年経ち、常設展示室は開館からそのまま、何度も訪れたい博物

館になっていない。

- ・市民のための博物館にするにはどういう博物館であればいいか、文化博物館が、未来につながるような博物館になるためにはどうしたらいいか、各委員が思うこれからの文化博物館のあり方を闊達に議論いただければと思う。

(委員 D)

- ・叩き台がなく、ワークショップの結果だけなのであれば、せめて市の計画などでどう考えられているかを土台にしないと、基本理念・ビジョンを議論するのは難しい。ある程度の叩き台がほしい。

(委員 E)

- ・事務局の問題意識、現状の考え方をまとめて出してほしい。
- ・子どもや親子、次世代に向けた取り組みと博物館のあり方がどのように交わっていくかは、1番大事にすべき。
- ・地域への誇りを持つ、シビックプライドにつながるような博物館のあり方を作れないか。
- ・地域そのものを博物館と位置付ける動きや、博物館のあり方やふるさと学習に新しい視点を持つことが必要。

(委員 A)

- ・「子どもたちの創造力や探求心」は重要だと思う。
- ・シビックプライドにつなげるには、大人たちとの関わりが必要だが、その機会は少ない。どのようにコーディネートしていくかが重要。具体的な事例はあるか。

(委員 E)

- ・明石市のワークショップファシリテーターのようなコーディネーター機能として、海士町(島根県)では、認定 NPO 法人カタリバが高校生と大人をつなげる活動をしている。

(委員 D)

- ・現在の博物館に収蔵されている資料や研究成果を今後どのように活用・残すか、どう考えているか。
- ・ワークショップなどを通じた課題解決も重要だが、博物館の基本的な役割としてのブレない基本、明石の財産を保管し、研究し、解釈していくことが必要。それには実物資料が欠かせない。博物館が明石の過去からの財産をどのように扱い、研究・保存していくかについての考えを聞きたい。

(事務局)

・現在行われている歴史、民俗、考古学などの研究に関する資料は引き続き大切に保管し、今後の研究や成果の発表に活用していく予定。今行っている取り組みを止める選択肢は考えていない。

・指定管理者を含む学芸サイドの職員は博物館の未来に向けて懸念を抱いており、次回以降、資料に関してだけでなく現場の具体的な課題をお示しするので、意見をいただきたい。

(委員 C)

・よりよい博物館にするための方向性を探るために、市の方向性の中での博物館の位置付けなどの情報は必要。

(委員 A)

・2018年には、明石市の文化芸術の方向性について7つの重要項目が示されていた。①次世代育成への取り組みの強化、②創造活動の推進、③他分野との連携と応用、④伝統文化の継承と発展、⑤参加発表機関の充実、市民参加型事業の継続推進、⑥情報の収集・発信の強化、⑦コーディネート機能の充実。

・各項目について、責任を持つ部署や機関が明確に定められており、文化博物館も次世代育成への取り組みの強化、他分野との連携と応用、情報の収集・発信の項目で担当とされていた。

・2018年以降、この方向性を継続するための審議会や推進会議がなくなっており、担当課の人たちもその内容を十分把握していない可能性がある。

(市長)

・明石の文化や歴史、博物館資料や研究蓄積は明石の宝だと思っている。30年にわたる文化博物館の蓄積や研究成果を大切に、市民や次世代に伝えていきたい。これまでの蓄積を無駄にせず、新しい方向性を模索していくために専門家や関係者の意見を取り入れたいので、私から提案してあり方検討会を開催している。

・博物館や文化政策を含めた体制や研究のあり方について、地に足のついた改善を図り、シビックプライドをまちづくり全体に繋げていきたい。

(委員 G)

・フレーズやキャッチフレーズが具体的な行動にどのように結びつくかイメージできない。

・「いつもワクワクできる」や「子どもたちの想像力や探求心を引き起こす」といったフレーズが、シビックプライドという概念とどのように結びつくか明確ではない。

・シビックプライドを考えるにも、誰を対象とするかでそのアプローチが変わってくるが、誰を対象とするかわからない。

・これからの展開に向けて、次回以降私たちが求める情報やデータを元に議論を進めることが重要である

(委員 C)

・文化財政策や市史編さん、展覧会を担当する指定管理者などが縦割りになっていることが第1回目や第2回目の話の中で明らかになっていると感じる。

・このような状況をレビューし、評価することも、見直しの一環として重要であり、縦割りの問題点を把握し、適切なステップを踏むことが必要。

【基本方針(方向性)】

《人材》

(委員 A)

- ・資料の収集・整理・保存・研究において、専門性を持つ人材の確保が重要とあるが、どういう専門性が必要か細分化しないといけない。
- ・保存スペースの適切さ、施設の改修計画などは、夢を語っても予算がなければ難しいので、どこかで線引きが必要。
- ・博物館を専門とする委員はこの辺りをどう考えるか。

(委員 C)

- ・学芸課長としては、専門性を持つ学芸員の持続可能性が担保されていないとの懸念がある。
- ・現在の学芸員が継続して活動するための体制がなく、持続可能性がない。また、多くの情報を持っている人がそれを誰かに引き継げる体制もない。専門性の持続可能性の確保が課題である。

(委員 B)

- ・資料の収集・保管・調査・研究・展示・教育普及など、多岐にわたる博物館の機能において、それぞれの専門性が必要である。
- ・特に地域の歴史文化系の博物館では、専門性を獲得するまでに時間がかかる。
- ・博物館にいろいろな機能が求められており、それらを担うレベルとしては明らかに人材が少ない。新たな役割が追加される中で、スーパーマンのように全てを担うことは難しいため、持続可能な形で人材を追加する必要がある。
- ・専門のファシリテーターなどに博物館の兼任として協力いただくことが考えられる。

(委員 A)

- ・人材、人事を具体的にどうするのかは、あり方検討会で踏み込めないが、一定の方向性は示した方がいい。

(委員 C)

- ・限られた人数の施設では、どのような人材が必要かを外部ではなく、館長が人事権を持ち、経営人材と専門人材を適切に配置することが理想的。
- ・経営人材も専門人材の一部であり、適切なガバナンス体制を持つことが重要である。
- ・現在の文化博物館の縦割り構造では、ガバナンスが効果的でないと感じており、そのことが一番重要である。

《バックヤード》

(委員 A)

- ・バックヤードなど施設面はどうか。

(委員 C)

- ・バックヤードは理想を言えば切りがないが、足りないと思う。しかし、その前に魚住収蔵庫や図書館、公文書館などでの資料の保管を市の方向性の中でどうしていくのかを整理する必要がある。

- ・施設間での資料の整理や相互利用ができるようにしないとうまくいかないと感じる。

《総合博物館》

(委員 A)

- ・「総合博物館」というワードが出ているが、大変ではないか。基礎自治体で総合博物館を持っているところはあるのか。

(委員 B)

- ・総合博物館は定義にもよるが、分野がいくつあるから、特定の展示があるから、特定の人材がいるから、で総合博物館とは言わない。

- ・総合博物館とするには、博物館の専門性や展示内容だけでなく、分野の融合性や幅広い人材の確保も重要。

- ・現在の学芸員の体制から総合博物館を目指す場合、より幅広い人材を確保する意向があるかどうか、その点が不明確である。

(委員 C)

- ・あらゆる分野が揃っていないと総合と言えないということはないので、カテゴリーとしては総合博物館で登録できると思う。

(委員 B)

- ・事務局がどういう思いを持って「総合博物館」と書いたかが重要だと思う。

(事務局)

- ・「総合博物館」は、市民ワークショップで出てきたキーワード

- ・市民ワークショップで、これまで歴史、民俗、考古学を主に扱ってきたが、新たに自然分野や美術など他の分野にも取り組むべきではないかという意見が出ていた。

(委員 B)

- ・1 の項目では「専門性を支える人材の確保」という表現があるが、2 以降ではこの表現が見当

たらないように思う。考古学や歴史学、近代文献史学に加えて、博物館教育学なども重要な専門性であり、これらの人材確保については考えているか。

(事務局)

・2に限らず、3、4を実現していくためにも、その分野の専門的な知識・経験のある人材は必要になっていくので、実際にうまくやっていこうと思えば、それ以外の分野の専門的な人材は必要であると考えている。

(委員 A)

・エデュケーターとして博物館で活躍している人は学芸員資格を持っているのか。

(委員 C)

・必ずしも学芸員資格を持っているとは限らない。エデュケーターという言葉が指すものが千差万別で、学芸員の中で教育、交流を担う人を指すことも、それ以外の職種としてエデュケーターを置いているところもある。

・2と3は地続きで考える方がいい気がする。博物館でやっているのが展覧会や教育普及で、博物館を出たら、交流促進や地域活性化になる。

・ボランティアの育成についても、博物館内での活動だけでなく、地域との関わりや交流を含めて考える必要がある。

・つながりを作って巻きこんでいくのが2、3で、受け入れる、受け身が4か。1～4の括り方をどうしていくのがよいか。

(委員 A)

・コーディネーターという専門性を持つ人材を本当に確保できるか。

(委員 C)

・実際、博物館の周りにそういう人材がいるのかということも含めて考えないといけない。

(委員 C)

・文化博物館だけではなく、天文科学館などとの共通の人材を確保すると交流を生むきっかけにもなる。

・共通人材を確保して、文化博物館と天文科学館両方に携わるのは、アウトリーチ系の仕事で有益な結果をもたらす可能性がある。

(委員 E)

・ぎふメディアコスモスでも、現場の中に全部を繋げてコーディネートしていくっていうセクションはなかった。総合プロデューサーが横をつないでいた。

(委員 B)

- ・館の目的やテーマに沿った専門性を持つ人材が独自の人材が必要。
- ・学芸員が持つ研究成果や興味を来館者に伝える、来館者と橋渡しをする専門性は、テーマが異なっても共通しており、博物館を横断して活動することも可能と考えられる。方向性によっては、市全体としての人材としての採用も考えられる。

(委員 C)

- ・ミュージアムティーチャーというような、学校教育に博物館をどう利用してもらうのかを先生の側から発想する人も大事な気がする。そういう人も共通人材になると思う。

(委員 F)

- ・神戸市では、教職員のチームと美術館、博物館を神戸大学のコーディネートで結んで、チームみたいな形を取っていると思う。

(委員 C)

- ・学校側の事情が博物館でわからないので、学校籍だけど博物館に5年間配置されてます、という人がいると、うまくいけば教材研究など、いいつなぎ役になってもらえる。

(委員 D)

- ・市が博物館にものすごく力を入れていたら、人材は来る。
- ・館長が人事権を持つのがいいのと同じで、ほかの人材も発言権があり、みんながフラットに話ができることが一番大事。

(委員 B)

- ・学芸員(研究系)と教育系の間に上下関係があることがあるが、同じ立場での議論や語り合いが重要である。
- ・学校との連携に特化した人事交流は意味がある。

《ワークショップ》

(委員 C)

- ・ワークショップとインタビューの形式によって方向性が異なるため、関わりの少ない人にはワークショップ形式では望ましい回答が得られない可能性がある。そのため、インタビュー形式の方が適していると思う。
- ・インタビュー形式では、PTA や町会、病院などをピックアップして、インタビューを行うやり方もある。

(委員 G)

・製品開発では、消費者のニーズを正確に把握することが重要であり、商品の売れ行きに大きな影響を与える。そのため、企業は利益追求の観点から、ディープなインタビューや消費者との接点を通じて市場調査を行っている。

・博物館でも同様に、ワークショップやインタビューを通じて情報収集を行う際には、ターゲットを明確に定め、どのような情報を求めるのか、どの層から情報を得るのかを明確にすることが重要。

・図書館利用者にインタビューをするのでも、時間帯によって話を聞ける人が替わる。

・意見聴取した結果を共感だけで終わらせるのではなく、効果的な情報収集のために目的を明確にすることが必要。

(委員 F)

・教師よりも、学生の方が異なる視点やアプローチでの意見を持っている可能性が高い。例えば、明石高校の美術科や魚住小学校のまちづくり協議会では、明石清水高校の学生と連携した取り組みが行われており、高校生や大学生のインタビューを通じて新たな視点やアイデアを得ることができるのではないかな。

(委員 E)

・高校生や大学生には図書館関係でも現状にこだわらない意見も、立場にこだわらない意見を出してもらっている。図書館で訊くよりもいいと思う。

《まとめ》

(委員 A)

・方向性やビジョンがまとまっていないが、次回までに事務局と話し合って、ビジョンや方向性を固めておくようにしたい。

(委員 C)

・委員もビジョンの私案や、決定過程のプロセスの提案、資料を出してもよいかな。

(委員 A)

・ぜひよろしくお願いします。